

幼児の母国語習得の過程に思うこと

岡 詔子

私の子供(平成16年11月現在, 1歳10か月)が日本語を習得していく過程を見ながら, 中学生以上の英語の学習についても考えてみた。

幼児の日本語の習得は, ある日「コップから水があふれるように」劇的変化が訪れる, というのが私の感想である。個人差はあるが, 1年ほど親などが話す日本語を聞いて蓄積し, ある日突然, 言葉をしゃべり出すのだ。一度言葉を発してからというもの, 私の娘は次々と新しい言葉を口にするようになっていった。子供は頭の中でかなり言語が整理されてからしゃべり始めるようだ。話すよりも先にたくさん聞いて覚えておくことは, 我々の英語学習にも必要だろうと思う。

娘の言語習得は「マンマ」「パパ」「ワンワン」「ブーブ(車のこと)」のような名詞から始まり, しばらく名詞ばかりを数多く身につけた後, 「ちゃんち(座る)」「たち(立つ)」「見た」「読んで」のような動詞, 「あっち(暑い・暑い)」「おいしい」「大きい」「変な」のような形容詞, 「じょうず(に)」「いっしょ(に)」「いつも」「結構」のような副詞, 「あーちゃんが」「あーちゃんの」のような助詞へと拡大していった。この間, 「読んで」より先に「おいしい」を覚えると言ったふうに, いくらか品詞が入り混じることは当然あったが, この名詞, 動詞, 形容詞, 副詞, 助詞という習得順は, はっきりと見られたと思う。そう言えば, 子供が覚えるのは, 英語も名詞から動詞, 韓国語は動詞から名詞の順で, これはそれぞれの言語が最も重視している品詞の違いによる, という話をどこかで聞いたことがある。日本の中学校の教科書の, アルファベットの次のページには, “pen”や“apple”などの名詞ばかりが載っている。日本語と英語両方の性質からして, これは理にかなったことだったのか。

子供はしゃべれるようになること自体がうれしいようだが, 褒められると喜んで, 一層しゃべろうと

する。機嫌のいいときほどよくしゃべるし, 知らない人の前では緊張して, 口が重くなる。我々が英語を学習する際も雰囲気づくりは大切だ。

子供はテレビから言葉を学ばない(ウォード198)と言うが, 大人(中学生以上)はどうか。私は大人にはテレビも英語学習の役に立つと考えている。本当に子供はテレビから学ばないのだろうか。今のところ自分の子にテレビを見せていないのでよくわからないけれど, 身の回りには幼児番組で挨拶やたくさん歌を覚えている子が多いし, それは学習が成立していると言えると思う。

しかし, 子供が実際の経験を通して学ぶことは, テレビから得る知識に勝るとも思う。子供が生活の中で実際に体験したことは, 言葉としての定着が非常によい。庭で見た虫や花の名前, いつも遊んでいるおもちゃの名前, 昨日食べたおいしいお菓子の名前, お母さんが叱るときに言う「めっ」, 家族がいつも自分に向けて言う挨拶の言葉, など例を挙げればきりがなし。大人だって, 実際に外国語を使ってコミュニケーションする機会があればなあと思うが, 日本国内ではなかなか難しい。

まったく, うらやましくなるような幼児の母国語習得能力だが, その習得促進にとりわけ大きな効果を示して, 私を驚かせたツール(子供にとってはおもちゃ)がある。それは絵本だ。

私は子供が3か月のころ, 面白半分「まだわからないでしょうけど」と絵本を読んでみた。ところが, 赤ん坊はいないないばあの本に反応し, じっと見ているばかりか, 時には笑うのだ。繰り返し同じ本を読んでいると, 何か月のときからか忘れてしまったが, いないないばあは動作もするようになった。そして10か月のときに, 居住する市からお勧め絵本のパンフレットと子供の図書館通いの手提げ袋をもらったものだから, 図書館通いを始めた。子供は絵本を読んでもらうのが大好きで, 親子で楽

しく過ごせるだけで私は満足だった。それなのに、読書には大きな副産物がついてきた。

気に入った本は何度も読んで、私の娘は文中のフレーズを覚えていった。本と離れているときも、私が「のせてくださいーい」(安西4,8,12,16)「たべちゃった」(岸田21)のような本の中のフレーズを唱えると、うれしそうに反応する。自分でも大人との会話中、適切な場面でそのフレーズを使用する。相当難しい言葉を上手に使って、大人を驚かせることもしばしばである。家族の使用語彙に含まれていないものも、子供は本から身につけた。

また、何冊も本を読んでいると、同じ語がさまざまな場面で登場する。このことは、覚えた語の記憶を強化するだけでなく、語感をつかんで、正しく使うのに役立っている。通常2歳前後で2語文をしゃべり始める、と大方の育児書には書いてあるところを、娘は「おじいちゃん、みかん早く食べて」のような4語文を発する。また、発話中に擬音語、擬態語や形容詞、副詞を用いて、センテンスを長くすることもよくある。例えば、「雨、じゃあじゃあ降りよる」「と(う)もろこし、とっってもおいしいね」といった具合だ。親バカを差し引いても、読書が言語習得にかなりプラスになっていると思う。

我が子を見ていて、私は改めて、学ぼうとする言語で書かれた本を読むべきだと感じた。私はこれまで高校生に英語を教える際、教科書を声に出して何度も読むよう言い続けてきたが、今後はもっと色々な読み物が使えないかと考えている。長期休業に1冊ずつ、とやっていたのでは、英語表現が使われる場面が思い描けるほどにはなかなかならないだろう。日常、気軽に洋書が手に取れる環境づくりから始めたい。私の娘の周りにたくさんの絵本が置いてあるように。

参考文献

- 安西水丸『がたんごとん がたんごとん』絵本 第43刷 福音館書店 1987
- 岸田衿子『かばくん』絵本 福音館書店 1962
- サリー・ウォード『「語りかけ」育児：0～4歳 わが子の発達に合わせた1日30分間』第6刷 小学館 2001
- 産経新聞「新・赤ちゃん学」取材班『赤ちゃん学を知っていますか?：ここまでできた新常識』新潮